

Title	T. S. エリオットの詩と評論(2) : エリオットの懐疑的精神をめぐる世界観と詩論
Sub Title	T. S. Eliot's poetry and criticism : on Eliot's world view and poetics conditioned by his scepticism
Author	山本, 証(Yamamoto, Akashi)
Publisher	共立薬科大学
Publication year	1976
Jtitle	共立薬科大学研究年報 (The annual report of the Kyoritsu College of Pharmacy). No.21 (1976.) ,p.73- 81
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	原報
Genre	Technical Report
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062898-00000021-0073

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

T. S. エリオットの詩と評論 (2) *

— エリオットの懐疑的精神をめぐる世界観と詩論 —

山 本 証

Summary

T. S. ELIOT'S POETRY AND CRITICISM

On Eliot's World View and Poetics Conditioned by His Scepticism

AKASHI YAMAMOTO

(Received October 15, 1976)

4. A Few Points of View on the Critical Evaluation of His Works.

How can we evaluate Eliot's works, from his earlier poetry to his later? It would be approved that, though his earlier poems were highly appreciated for revealing the modern reality in our destructive civilization and for innovating a new mode of expression in modern poems, his later poems were less appreciated because the source of his imagination seems to have been exhausted. I think, nevertheless, we have to investigate more clearly several phases of his world view and poetics conditioned by his scepticism.

The first important problem that must be considered is whether or not Eliot could overcome his scepticism. After he decided to become a classicist, Royalist, and Anglo-Catholic, his ideas and poetic imagery were distinctly changed. In spite of having been converted to Anglicanism, it is evident that he, as S. Spender said, unsuccessfully expressed the hope of the religious world in his later poems, and he only chose the gloomy world of meditation, that of transcendentalism. And then, in his later critiques, as H. Laski pointed out, Eliot became politically a reactionary ultra-conservative. Though he could transcend his scepticism subjectively, he could not overcome it objectively, but produced a newer illusion in his world view.

However, this is the external criticism, so I intend to investigate the internal, literary problem of his poems through his famous critique, *Tradition and the Individual Talent*, 1919. His themes are 1) the historical sense and order, 2) the poet's spirit is a catalyst, and 3) the escape from emotion and extinction of personality. He says tradition involves the historical sense, which involves a perception, not only of the pastness of the past, but of its presence. And the poet who obtained the historical sense has to approve the idea of order, of the form of European literature. If the poet can understand it, he is to readjust the relations, proportions, the values of each work of art toward the whole. In order to do so, the poet has to make his mind inert, neutral, and unchanged. The mind of the poet, therefore, becomes the

* 第一報山本：共葉年報，20，95 (1975)

shred of platinum, the catalyst, using the analogy. In fact, he ought to escape consciously from emotion and personality.

It may be appropriate that the younger critics and poets criticized Eliot's literary points of view, because he expressed his sceptical visions in his poems while using his vast knowledge and erudition, thus making his poetry complicated and difficult to understand. They were difficult as well as pedantic, and reduced the value of both past and present. His emotion and personality were withered up, so to speak, year after year. The more the mind of the poet was reduced to neutrality, the farther his originality flew up and disappeared into vanity. Did he cease to be significant as an artist? A lot of younger poets would answer the question…….

4. エリオット批評をめぐる若干の視点について

すでに跡づけてきたとおり、エリオットの初期の詩の〈不可知論の世界〉から、〈慈雨待望の世界〉と〈祈りの世界〉の長い決断の延期の懐疑的精神の展開を経て、ヨーロッパの文学的・政治的・宗教的な正統＝伝統への回帰を決断し、懐疑的精神を超克して後期の詩の〈ざんげの世界〉〈瞑想の世界〉に没入するエリオットの詩の全過程は、詩における文明批判の機能を前提とすれば、どのように評価したらよいであろうか。一般に『荒地』に至る初期の詩の現代文明の崩壊の認識の形象化と、詩の技法の革新性に対する評価の高さに比較して、後期の宗教詩的〈瞑想の世界〉は、詩的イメージの枯渇からくるエリオットの創造力の衰頹だという批判がなされる。このことはエリオットの詩を総体として評価すれば、一面の妥当性をもつことは確かである。しかしながら、エリオットの懐疑的精神の超克をめぐる問題は、たんに彼の詩を総体として評価するのでは不十分な、多面的問題を孕んでいるように思われる。

まず問題になる点は、エリオットは彼の初期の詩の主調音である懐疑的精神を、はたして真に超えることができたのかということである。さらに正確に言うなら、エリオットが超えることができた面と、できなかった面があるのではないかという問題が提起される。現代文明の中での自己疎外の一形態として懐疑的精神を見るなら、疎外からの解放は、自由の認識であるはずだ。つまり人間存在の必然性の認識であるはずだ。エリオットの詩をそのコンテクストの流れで見るかぎり、確かに、例の宣言（文学的には古典派、政治的には王党派、宗教的にはアングリカン・カソリック⁹⁴⁾）を転換点として、現代文明の「荒地」的状況認識を超克したことは、先に跡づけたとおりである。『プルーフロック』から『荒地』に至る詩の世界と、『聖灰水曜日』『四つの四重奏』の世界との主調音の差異は明確である。先に見た『四つの四重奏』における‘…declare / The one discharge from sin and error ⁹⁵⁾’（罪と過ちから / ただ一つの解脱を宣命する）白熱の恐怖のバラの焰の舌の「贖罪」のイメージは、エリオットの懐疑的精神の「罪と過ち」を超絶する宗教的〈瞑想の世界〉への精神軌道を明確に形象化している。

しかしながら、そこに真に疎外から解放された、必然性の認識——真の自由の獲得があったかどうかはきわめて疑問である。それ故、詩人の後期の詩への主調音の転換をもって、いわゆる「懐疑的精神」を克服したと性急に結論づけることは早計であろう。つまり初期の詩のモダニズムの漸新さが、後期の詩の「宗教詩」への退却にともなって創造力の衰微をもたらし、リアリティを枯渇させたとするなら、少くとも文学的次元では、エリオットは超克したのではなくて、より大規模なシジフォスの刑罰に処せられたことになる。たとえば、S. スペンダーは『四つの四重

奏』を高く評価する立場に立ちながら、一つの感懐をこめて『四つの四重奏』の中でエリオットは形而上的世界——宗教的世界への信念や個人の救済の希望を表現しようとしたのだろうが、エリオットは完璧なライフワークとして、例えば『キリスト教社会の理念』で述べているような、キリスト教文明への希望を詩的に形象化するという意味での完璧なライフワークを完成していないと、エリオットを批判した思い出を語っている⁹⁶⁾。つまり後期の評論の中での熱心な「宣教者」エリオットの信仰へと「開かれた」姿は、後期の詩の中では、ついに形象化されず、宗教的確信は詩の中では個人の内面的な「閉された」世界に収斂しており（スペンダーは、この内面への収斂を評価しているのであるが）、後期のエリオットの詩と評論の乖離を指摘したものである。結局、エリオットの世界観は主観的認識論として宗教的・政治的には懐疑的精神を超えたと自から宣言していたとしても、文学的・詩的には、それを形象化することに失敗し、超えることはできなかったという視点——『四つの四重奏』の中で新たな存在論的な懐疑のイメージ（死の世界への没入）にのめり込んだとする評価である。

それでは、世界観の次元として、宗教的・政治的にエリオットが、はたして超克できたかという問題についてはどうであろうか。これに関しては、スペンダーとは正反対の立場から、H.ラスキ Harold J. Laski (1893—1950) の興味ある批判がある。ラスキは『岐路に立つ現代文明』*The Dilemma of Our Times*, 1952 の中で政治・宗教・社会・文化を相関的にとらえる時、エリオットのキリスト教文化論は、現代に重く押ししかかっている文化の危機に解決の展望を与えるためには、少くとも「三つの大きな障壁‘barriers’」を超えることができなかったとする。

それをやや図式的にまとめれば次のとおりである。第一に政治・経済の制度上の問題として、エリオットは「政治とは起りうべきことにかんする技術であること⁹⁷⁾」を知らず、すでに産業革命期・フランス革命期の衝撃で衰えていた時代の古い制度を、20世紀にもちこもうとした。「彼（エリオット）は、われわれの現在の諸価値は崩壊状態にあると主張する。しかし彼の希望していることは、いかにしてこの状態から新しい統合へ前進するかを発見することではない。彼はすくなくとも半世紀前にはすでに相当衰えてしまった価値を、いかに回復するかを発見しようとするのである。⁹⁸⁾」換言すれば、19世紀から20世紀にかけて経済的構造の土台をなす生産力と生産関係の矛盾が巨大な変化をとげ、政治制度上の矛盾が激化している歴史の発展法則の必然性を理解する視点を持たなかったとする批判である。

第二は、宗教的次元の批判である。エリオットの『キリスト教社会の理念』にもとづく理想的社会の主張——あらゆる文化がその生命力を持つためには宗教上の信仰を受け入れることが必須条件であり、したがってヨーロッパ文化の再生にはキリスト教の伝統を継承することが必要だという主張に対して、ラスキは、キリスト教は倫理的価値体系という意味では、他の新しい社会制度でも継承できうるし、神学的教義としては、その真実性が合理的・理性的な検討を経るなら歴史上の普遍性を獲得できないとし、また、キリスト教文明のヨーロッパ文明に対する影響力の深さは当然だとしても、同様にギリシャ・ローマ文明の影響も深いわけで、キリスト教への文明の影響力を絶対化できないとする。結局キリスト教の生命力は社会的・公的な次元としてではなく、非合理的・私的な信仰の次元において、信仰者にとってのみ妥当性をもつものだと批判している。⁹⁹⁾

第三に、社会学的な障碍として、エリオットが、文化的諸関係の内容と社会的諸関係の総体とのあいだの直接的関係を認めず、「家柄と富をもつ世襲的貴族階級が国権の最高の政治的機能

を主として掌握しているような社会機構を再建することができると想像」したのは、むしろ「妄想にちかいユートピア的空想だ¹⁰⁰⁾」とラスキは決めつけている。確かにエリオットの世界観には、20世紀後半の今日から見れば、全く説得力を持たなくなった、特権的な身分意識、その裏がえしの大衆を愚衆と呼んではばからない特権意識がある¹⁰¹⁾。

そして、その特権階級の無責任な権力の行使を許容すれば、それはファシズムの肯定につながることを見てとったエリオット批判者はラスキの他にもいた。たとえば、S. フィンケルシュタイン S. Finkelstein である。エリオットが社会現実の諸様相に対して反感をもち、それらを世俗主義と侮辱し、「大衆を歴史の舞台における活動へと引き上げたさまざまな諸力——ロマン主義、科学、民主主義、工業化¹⁰²⁾」の担い手である大衆に対して侮蔑感を隠さなかったことをとらえ、フィンケルシュタインは「彼（エリオット）の思考は完全な意味において反動的であって、それは単に反民主主義というばかりでなく、近代の‘諸悪’以前の過去の時代の精神にかくれ家を求めようとする¹⁰²⁾」と批判し、「1930年代になると、民主主義と人間の力量を軽蔑し、‘権威’を信奉し、人間の福利の改善の可能性を冷笑するエリオットの思想は、ヒットラーの第三帝国を実際に支持しない限りでもっとも近いところまで、ファシズムに接近した¹⁰³⁾」と、エリオットの『キリスト教社会の理念』を一掃的に非難する。

エリオットのこうした政治的超保守主義は、1930年代後半のスペイン内戦に関する彼の発言にも、よく表われている。衆知のようにスペイン内戦は、当時のスペイン共和国政府に対して、ファシスト＝フランコがヒットラーのナチの援助のもとに反乱を起こし、共和国政府側は人民戦線を結成して戦ったが、ついに敗北のうちに終結した内戦であった。スペイン内戦は、第二次世界大戦前夜のヨーロッパの風雲急を告げる状況——ファシズムによる文明の根本的否定を予見させる「文化の危機的状況」をもっとも劇的に歴史の舞台に顕在化させた事件であった。それだけに、各国の多数の文学者が共和国＝人民戦線側に立って論陣を張り、ある者はスペインに飛んで戦い、何人かの作家・詩人が戦死した。こうした状況のもとで、エリオットはスペイン内戦についての立場を次のように表明した。「わたしは当然同情しているけれども、それでもなお、少なくとも少数の文学者は孤高を保ち、いろいろな集団的な行動に参加しないことが最善だと確信している¹⁰⁴⁾」と、いわば「中立宣言」をしている。当時の圧倒的多数の文学者が反ファシズムの態度であり、僅か数人のみが親フランコの態度を表明した状況の中で、エリオットの中立的態度は、いかにファシズムに傾斜していたかを、みずから告白したのと言えよう。

以上のとおり、エリオットの後期の文化論に表われた世界観は、彼の政治的・宗教的態度を具現したいわば「政・教一致」の「王党派・アングリカン」としての、近代民主主義思想に離反する超保守的体質を明確に表現していることは疑う余地のないことである。エリオット自身にとって、それは彼の懐疑的精神の超克の主観的な実践であったとしても、その妥当性が歴史的な必然性、普遍性を獲得するために必要な説得力が稀薄であることは明白であろう。さらに言うなら、エリオットは文学と政治における宗教の優位性を、一方では詩作の実践の中に（『四つの四重奏』）、他方では現実の社会変革の中に（『キリスト教社会の理念』）確立しようとして、きわめて能弁に語ったのだが、彼の主観的意図は、文学的にはスペンダーが批判した意味で、政治的にはラスキが批判した意味で障壁を超えることができない矛盾を内包していたわけである。

しかしながら、エリオットの宗教的・政治的立場は、一掃的・一括的に批判できえたとしても、それをもって、彼の初期の詩を含めた詩の総体を評価したことになることは当然である。

あるいは、文学プロパーの視点から言えば、エリオットがいかに宗教的・政治的観点を過剰に後期の実作にもち込み過ぎたとしても、エリオットの詩作総体の批判の方法として、宗教的・政治的次元で短絡的に批判するとすれば、それは、いわば片手落ちの「外在的」批判にすぎないことも当然である。そこで次の問題として、エリオットを初期の作品に立ち戻りながら、詩人の世界観と詩作の方法の相関関係を留意しつつ、再びエリオットの懐疑的精神の超克をめぐる問題の評価について検討してみたいと考える。

既に触れたように、エリオットの初期の詩と表裏一体をなす詩論の主張として書かれた『伝統と個人の才能』を検討すれば、後期の傾向を内包するような詩人の世界観・文明観と懐疑的精神に色濃くぬられた実作の詩の相関関係をかなり明確にすることができよう。エリオットは「伝統論」の中でおおむね三つのテーゼを主張し、『荒地』に至る初期の詩作の自己擁護をした。第一は「歴史的感覚と秩序」についての、第二は「詩人の精神＝触媒」論についての、第三は「情緒からの逃避と没個性」についてのテーゼである。

第一の「歴史的感覚と秩序」について、エリオットは英文学を含むヨーロッパ文学の総体を超時間的・同時的存在としてとらえ、それが文学の秩序を形成すると考える。この秩序の観念は、現代性をもつすぐれた芸術作品を創造する詩人にきわめて鋭敏に意識され、新しいすぐれた作品が文学の秩序に入ると、古いものと新しいものとの間に秩序の変更が加えられ、その釣り合い・価値が再調整され、新・旧の文学作品の間に順応がおこるとする。従って、「現在が過去によって導かれると同様に、過去が現在によって変更され」「新しい作品が……過去の秩序にうまく適応しているということは、その価値の試金石¹⁰⁵⁾」であるとする。

『プルーロック』から『荒地』に至るエリオットの詩作が年を追う毎に、このヨーロッパ文学の中にある超時間的・同時的「秩序の観念」の形象化に力がこめられてきたことは、彼の詩に過去の偉大な文学の断片が随所に引用され神話が下敷にされるようになることでもわかる。20世紀的現代性をもつ崩壊感覚の心象の中にエリオットはおびただしい過去の諸文化についての博識・学識・術学をもち込み、詩作に注釈を加えながら、詩的価値の再調整を実践しようと試みた。しかしながら、エリオットの歴史的感覚＝秩序の観念は、R. フォックス **Ralph Fox** (1900—1937) が批判するように、エリオットが結局「過去をも現在をも卑しく扱っている」「a scurvy treatment of both past and present¹⁰⁶⁾」ことの証拠にはならないであろうか。過去の伝統が現在に引きつがれるということは一面の自明の真理であるとしても、過去は現在なくして意味がないし、時々刻々変化する現在は、それぞれ独自に過去を判断するはずだ。詩人の感性にとって必要なことは、超時間的な歴史的感覚の秩序の観念によって過去の遺産を受動的に相続することではなく、現在を詩的・情緒的な創造的エネルギーで変革するために、過去を継承し、能動的にそれを用いるのではないか。現在を死んだ過去の中に埋葬することは、A. ケトル **Arnold Kettle** が指摘するように、「過去の価値をも、現在の価値をも零落させる」‘… it reduces the past as well as the present.¹⁰⁷⁾’ ことにつながる。

そしてまた、C. コードウエル **Christopher Caudwell** (1907—1937) が『荒地』に言及しながら¹⁰⁸⁾、「伝統論」を批判したように、エリオットの「現代」を「過去の文学」で描き、過去への埋没を絶対化する詩作法は、不可避的に現代を死の世界に没却させることになり、懐疑的精神に死の世界への引導を渡すためには有効であるとしても、感性的次元で（宗教的次元ではなく）懐疑的精神の克服の決断を阻碍する条件になるのではないだろうか。同時にまた、詩と読者の共有

すべき情緒的關係は、彼の入念な「注釈」——決して感性的経験の代用品になりえぬ「注釈」によって疎隔させられるばかりか、読者はエリオットの世界観と共に彼の個人的文学経験を強要される。彼のヨーロッパ文学の正統的伝統の主張にもとづく「歴史的感覚と秩序」の観念は、情緒的媒介としての詩の機能の普遍性を収縮させ、詩の情緒的普遍性を閉鎖的個人主義の陥穽に突き落しかねないのである。それでは、ヨーロッパ文学の歴史的な伝統を感得するという一見普遍的に見える命題が、エリオットにおいては何故「歴史的感覚」から普遍性を剥奪してしまうのだろうか。それはエリオットの第二、第三のテーゼにかかわる問題である。

「詩人の精神＝触媒」という第二のテーゼに移ろう。エリオットは詩の創造過程における詩人の精神を、二つの元素が化学反応をおこす際の「触媒」のアナロジーで説明する¹⁰⁹⁾。酸素と二酸化硫黄が化学反応をおこし「亜硫酸」になる時の「触媒」としての「白金」の役割を、情緒 emotions と感触 feelings が多様な結合をとおして詩的反応をおこす時の「触媒」としての「詩人の精神」の役割に類推して説明する。「触媒」としての白金（詩人の精神）は化学反応（詩の造形）に不可欠でありながら、化合物（作品・詩）に何らの痕跡をもとどめず、白金そのものも何らの影響を受けず、不活性で、中性で、無変化のままでいるというのだ。詩人は「経験する人間と創造する精神との分離が彼の内部におこり」「この精神はその素材たるもろもろの熱情を完全に消化し変質させる」とする。

この化学反応の説明には化学的誤謬が含まれている。名称の誤りは別として¹¹⁰⁾、この場合の化学反応に必要な触媒は白金でなくてもよく、また 400~500°C の加熱が必要条件である。詩の造形過程で、詩人の精神が不活性で、中性で、無変化のままであり得ようか。そしてまた、触媒のみならず、かなりの精神的熱情の加熱、精神的高揚も不可欠である。『荒地』にしても、現代社会の不条理な疎外感や文明の崩壊感覚を反映した様々な情緒や感触を結合させ、神話や過去の文学の語句やイメージを混合させる「経験する人間」の内面世界の中で、詩人の精神は相関的な情緒的震動を起こしながら精神的高揚と熱情の加熱の火花を散らし、詩を創り上げたのではないか。詩作における二元論ではなく、詩作の弁証法が適用されるはずだ。詩人の精神は現代の疎外状況の中で能動的にしる、受動的にしる、活性であり、変化し、中性にとどまることはあり得ない。なぜなら、観念にしる、感性にしる、情緒にしる、熱情にしる、それは一つの精神の状況であり、精神だけが神の視点のように超越できると仮定することは、「死の世界」を夢想することに等しいからだ。

詩人の精神を「中性」に押しとどめようとするエリオットの試みは、たとえば『荒地』テレシアス Tiresias のイメージによく表われている。

I Tiresias, though blind, throbbing between two lives,/Old man with wrinkled female breasts,...¹¹¹⁾

(このわたしテレシアス、盲目ながら二つの性のあいだを動悸して / ひまびた女の乳房をもった老人、……)

エリオットは「テレシアス」に注釈を付けて、この中性の老人は「たんなる傍観者で、登場人物ではないが、この詩の中で、他の全ての登場人物と結合する最も重要な人物である……実際、テレシウスが観るものがこの詩の本質である¹¹²⁾」と言う。とすればテレシアスは「詩人の精神」とも言うべきもので、プルーフロックからゲロンチョンに到る詩人の分身、詩人の視点とも言えそうな「象徴」である。テレシアスは自注で言うほど『荒地』の中で重要性をもつイメージの形

象化に成功しているとは感じられないのだが、現代文明の「荒地」的状况を観るはずの「詩人の精神」が、単に傍観者として「中性」の萎びた乳房しかもため老人であるとするなら、詩における文明批評の普遍的機能を十分に発揮できないのではないか。こうしてみると、エリオットの「詩人の精神=触媒」論は、彼の精神が歴史や社会現実を受動的にかかわらざる得なかったことの、すなわち現在をも過去をも卑しく扱わざる得なかったことの弁明ともとれるのである。

第三のテーゼ「情緒からの逃避と没個性」の主張は、詩人の精神を傍観者的な「不活性・中性・無変化」に押しこめようとするエリオットの第二のテーゼと共に、「歴史的感覚」と関連して考察してみる必要がある。彼は言う。「詩人は過去の意識を発展させ、あるいはかち得なければならぬ……このようにして詩人というものはあるがままの自己を、なにかより価値のあるものにゆだねてゆくことなのだ。芸術家の進歩とは、いわば自己犠牲、たえざる個性の滅却なのだ¹¹³⁾」そして詩は「情緒の解放」「個性の表現」ではなくて、「情緒からの逃避」「個性からの逃避」であるとする。しかし「もちろん、個性や情緒をもっているものだけが、これらのものから逃避したいということがどういう意味なのか知っている¹¹⁴⁾」とも言う。

言うまでもなく、ここで問題になっている「情緒からの逃避=没個性」のテーゼは、詩人がヨーロッパ文学の「正統」である過去の文学の伝統へ回帰することによって、「秩序」に身をゆだねるための「歴史的感覚」の獲得を前提としている。「歴史的感覚」とは前述のように「過去の意識を発展させる」、あるいは過去の意識を「かち得る」ことであったのであるから、詩人にとっては、断えず現在の情緒の内的世界——詩的・感性的経験を超越することが要求されているのだ。S. スペンダーは、こうしたエリオットの「没個性」の主張を擁護して、「エリオットのごとき詩人は発展しつつ、自己のうちなる主観的要素を脱皮する。彼の生長は自己の外なる、非個性なるものに参入すること、絶えまなく拡大する客観性に存する¹¹⁵⁾」と言う。しかしながら、エリオットは世界観の次元で、自己の主観的な要素を脱皮しようとして超保守的な王党派・アングロ・カソリックに参入したのであり、そしてこの世界観には歴史的な客観的普遍性が存しなかったが故に、新たな大規模な主観主義、宗教的超絶主義 **Transcendentalism** に陥っていったのではないか。そのために、かえって詩的・文学的には彼の後期の詩から「情緒」や「個性」の詩的魂を抜き去ったのではないか。

結局のところエリオットは「歴史的感覚」を旗じるしにして、芸術家として退歩し、過去の世界に退却し、そのことによって、過去をも現在をも零落させ、詩人の精神を不活性で中性で無変化な「触媒」として窒息させ、そのために彼の詩の「個性と情緒」を消却させたようである。しかも個性 **personality** を超えるために、きわめて主観的な個人主義 **personalism** の「閉された」観念論の鎖りをますます重く引きづったので、彼の詩はますます深く懐疑的精神の奈落到没入することになった。

しかし、それにもかかわらず、エリオットの初期の詩には、感動を呼ぶ心象や情緒や幻想があるのは何故なのか。それは、詩人の世界観や詩論の保守主義、擬古主義、そして個人主義的観念論にもかかわらず、初期の詩の行間に、現代文明の崩壊感覚に深く根ざした、初期のエリオットの「個性」や「情緒」が氾濫していたからではないか。現代文明を告発する自己の鋭敏な「個性」が、個人の文学的経験に結びついて情緒的に組織され、いわば社会的自我として詩的感動の普遍性を獲得しているからではないか。そしてその感性が最も典型的に現代を表現しているからではないか。エリオットの初期の詩は、彼の懐疑的精神の「個性」の氾濫であった時にもっとも現代

を「歴史的」に具現し、詩人の精神が活性であった時に鋭い文明批評として詩的言語による社会的媒介の機能をリアルに発揮し、個人的・内面的情緒を普遍化して現代の情緒の典型を表現することに成功したのだと思われる。

エリオットの初期の作品を素朴に概括するなら、初期の評論は「創造的要素」を、初期の詩は懐疑的精神の「破壊的要素」を表現しているように思える。しかしながら、評論における「創造性」が超絶主義に飛翔してゆき、世界観が観念論の鎖りに縛られてゆけばゆくほど、「創造性」の擬性が明白となり、エリオットの詩的感性は閉された内面で痙攣する。そして、初期の懐疑的精神のいわば方法的懐疑としての現代文明告発の「文明批評」的個性は、ピロニズム的懐疑の淵を徘徊しながら、究極的には本源的懐疑の奈落に没入してゆく。こうしてエリオットの「伝統論」の擬創造性は、エリオットの詩から個性と情緒の普遍性を奪い去り、方法的懐疑を放棄させ、「生きることの唯一の理由は、それが死の機会であるから、とでも言いたげな¹¹⁰⁾」本源的懐疑に陥入り、歴史的必然性・普遍性を剥脱された世界観を用意したかのようである。そうして、エリオットはロレンスやジョイスと共にイギリス文学1920年代のエポックの典型的役割りを担いつつ、同時にこの時代の墓碑銘となった。この墓碑銘をのり超える視点の創造のためには、詩の機能を全面的に明らかにしようとした当時の若い詩人の登場が必要だったのである。

〔注〕

- 94) A. Alvarez, *Stewards of Excellence*, P. 20.
- 95) T. S. Eliot, *Four Quartets: Burt Morton*, ll. 204—205. 二宮尊道訳『四つの四重奏』84頁。
- 96) 福田陸太郎・徳永暢三訳『スペンダーの評論』(昭43・英潮社)163頁。*The Encounter*, (April, 1965).
- 97) H. J. Laski, *The Dilemma of Our Times*, (Kelley, 1952), p. 123. 大内兵衛・節子訳『岐路に立つ現代』(昭35・法政大学出版局)151頁。
- 98) *Ibid.*, pp. 120—121. 邦訳, 148頁。
- 99) *Ibid.*, pp. 125—126. 邦訳, 154—155頁。
- 100) *Ibid.*, p. 126. 邦訳, 156頁。
- 101) T. S. Eliot, *The Idea of a Christian Society*, (Faber, 1939), p. 121. 邦訳『全集』5巻157頁。
- 102) F. Finkelstein, *Existentialism and Alienation in American Literature*, (International Pub. 1965), p. 173. 永原誠訳『実存主義とアメリカ文学』(昭42・紀国屋書店)175頁。
- 103) *Ibid.*, P. 181. 邦訳, 185頁。
- 104) Murray Sperber (ed.), *And I Remember Spain*, (Hart-Davis, MacGibbon, 1974), p. 206.
- 105) T. S. Eliot, *Selected Prose: Tradition and the Individual Talent*, (Penguin, 1919), p. 24. 『全集』第5巻, 8頁。
- 106) Ralph Fox, *The Novel and the People*, (International Pub., 1945), pp. 115—116.
- 107) Arnold Kettle, *An Introduction to the English Novel*, (Hutchinson University Library, 1953; Reprint, Kinokuniya Bookstore Co., 1968) Vol. II, p. 137.
- 108) Christopher Caudwell, *Romance and Realism*, (Princeton University Press, 1970), pp. 127—128.
- 109) T. S. Eliot, *Selected Prose*, pp. 26—27. 『全集』第5巻, 11—13頁。
- 110) 酸素と二酸化硫黄が化合すると「亜硫酸」ではなく「無水硫酸」となる。また化学変化における触媒は白金に限られず、酸化二鉄、五酸化ナトリウムなどの酸化物でもよい。
- 111) T. S. Eliot, *The Waste Land*, ll. 218—219.

- 112) T. S. Eliot, *Collected Poems 1909—1935*, (Faber) p. 80.
- 113) T. S. Eliot, *Selected Prose*, pp. 25—26. 『全集』第5巻 10—11頁。
- 114) *Ibid.*, p. 30. 『全集』第5巻 16頁。
- 115) Stephen Spender, *The Creative Element*, (British Book Center, 1954), p. 60. 深瀬基寛・松上至孝共訳『創造的要素—第1部・夢を孕む単独者』(昭31・筑摩書房) 105頁。
- 116) R. A. Scott-James, *Fifty Years of English Literature 1900-1950*, (Longman, Green & Co., 1951), p. 161. 小田島雄志訳『現代文学の五十年』(昭35・英宝社) 259頁。